令和３（２０２１）年度　御船町立高木小学校　学校便り

高き志【こころざし】

目指す学校像
地域とともにある
勢いのある学校

No. 28（R3. 12. 9発行）文責 校長 福田雅也

わたしのお父さん

今回は、３年生の　水本澪さん　が書いた作文を抜粋して紹介したいと思います。この作文は、熊本県が主催した「心の輪を広げる体験作文」で優秀賞を受賞し、熊本県知事から表 彰を受けました。
素晴らしい作文ですので、ぜひ多くの方々に知っていただきたいと思い、本人とご家族のご承諾をいただいたうえで掲載することができました。

わたしのお父さん　　高木小学校　３年　水本みお

わたしのお父さんは、手も足もわるくないし、耳も聞こえる、目も見えるけれど、体の中にある「じんぞう」という場所にしょうがいがあります。おとうさんのしょうがいは、まんせいじんぞうぜんと言います。このしょうがいは、自分の力で血をきれいにすることができないというしょうがいです。なにもしなければ体 中にきれいじゃない血がまわって、長くは生きられません。だから週に三回、一回５時間のちりょうをうけなければいけません。お父さんはわたしたちに、５時間何もできないこと、熊本じしんみたいなことがあっても家族をまもれないことが不安だと言っていました。それと体の調子をくずしてお仕事を休むことがほかの人より多かったそうです。そしてお母さんもお父さんがいないのが不安だと言っていました。わたしもお父さんがいないのは、さびしいと思っていました。
ある日、いつものようにほいく園におくって行ってくれましたが、その日の夕方、家に帰ってもお父さんは帰ってきませんでした。朝になってもお父さんがいなかったのでお母さんに聞きました。するとお母さんは、お父さんがにゅういんしたことを教えてくれました。新しいじんぞうを体の中に入れるしゅじゅつをするから、しばらく会えないということを聞きました。わたしは、お父さんのかかえているびょうきが、はじめていやだと思いました。でも、すきなりょこうや食べたい物をがまんする生活が何年もつづいていたのでかわいそうだとも思いました。
しゅじゅつをうけてからのお父さんは、わたしたちよりもびょうきにかかりやすくて、たくさんくすりをのまなくてはいけませんが、ほぼ毎日いてくれるようになりました。今は、まえにしていたとうせきもしなくなりました。今はお父さんがいてくれるのがふつうのように感じます。
わたしは、お父さんにじんぞうをていきょうしてくれた人にとてもかんしゃしています。名前も顔も分からないけれど、元気なお父さんにしてくれてありがとう。

以前、マザーテレサの「愛の反対は無関心です」という言葉を紹介したことがあります。私は、この作文の最後の文章を読んだ時、なぜかこの言葉が頭に浮かびました。なぜなのか自分なりに少し考えてみました。
澪さんは、お父さんが透析をしなくてよくなり、家にいてくれることがとても嬉しいはずです。しかし、それと同時に腎臓を提供してくれた人への感謝の気持ちをしっかりと持つことができているのです。自分や家族以外に目を向けることができているのです。そんなことが頭を巡り、この言葉が頭に浮かんだように思います。

澪さんの作文を読むと、私たち教師が知らないご家族との日常生活の中で、子どもたちは色々なことを経験し、色々なことを感じたり思ったりして心を成長させているのだと改めて感じます。
高木小学校は現在人権旬間に入っています。いつものように人権学習の授業を中心に教育相談も行い、子どもたちが自分と同じように周りの友達を大切にし、明るく楽しい学校生活が送れるように取り組んでいます。この取組が、ご家族との温かい日常生活とリンクして、子どもたちの心（人権感覚）が少しずつ少しずつ育っていってくれればと思います。